

池田大作の教育思想—女子教育の観点から（3）

—教職員から見た草創期の創価女子学園とは—

富岡比呂子

はじめに

1. 調査の概要

- ① 本研究の目的
- ② 調査対象・時期
- ③ 調査内容
- ④ 倫理的配慮
- ⑤ 分析方法

2. 結果

- ① 創立者について
- ② 草創期の創価女子学園
- ③ 教員として感じたこと
- ④ 女子教育について

3. 考察

- ① 創立者と学園生
- ② 幸福観と女性の生き方について
- ③ 追加調査でわかったこと

はじめに

本研究は、去年筆者がおこなった女子教育に関するインタビューの追加調査といえるものである。去年の調査では創価女子中学・高等学校（以下、創価女子学園）に着目し、卒業生たちのオーラル・ヒストリーを通して、創価女子学園開学時の女子教育における教育実践とその歴史、及び創立者の池田大作（以下、池田と記す）の教育思想の検証を試みた⁽¹⁾。

インタビューでは、調査にご協力いただいた方々から草創期の創価女子学園について様々な視点からの話を聞くことができたが、その中で、もし当時の教員から話を聞くことができるならぜ

⁽¹⁾ 富岡比呂子「池田大作の教育思想—女子教育の観点から（2）—」創価教育研究所『創価教育』3号、2010年、15－42頁。

ひともあたってみてほしいとの要望があった。筆者自身も、教員の視点から見た草創期の学園や創立者と学園生の絆などについて関心があり、本調査に至ることとなった。

卒業生ではなく、教職員という立場で学園建設に携わり、創立者と関わる中で、何を経験し、どのように感じたのか。教員の目から見た学園とはどのような場所であったのか。入学し、卒業していく学園生たちをどのような思いで見つめ、またどのように生徒たちの教育に携わっていたのだろうか。そこには、自ずから卒業生とは異なる着眼点や志向が見出され、池田の女子教育における思想の独自性を検討するうえで新たな示唆が得られるものと考えられる。本稿では、創価女子学園の草創期の状況を教員の視点から検討することを試みる。

1. 調査概要

① 本研究の目的

草創期の創価女子学園について、教員の視点からの語りを通して検討することを目的とする。開校当時の学園の状況、創立者との絆、学園生の様子、自身の教員としての変化、女子教育についての見解などを聞き取る中で、学園での教員生活が本人に与えた影響や意味づけを探る。本研究は質的・記述的研究であり、対象者自身の語りを基本にした分析をおこなう。調査方法としては、前回と同じオーラル・ヒストリーの形をとり、語りの中から浮かび上がってくる個々の見解やふりかえり、意味づけを分析の対象とする。

② 調査対象・時期

調査対象は、関西女子学園（創価女子学園）の草創期に教員として勤務していた女性2名。2010年10月から11月にかけて聞き取り調査を行った。半構造化インタビュー方式で、対象者の同意を得た上でICレコーダーに録音をおこなった。インタビューはすべて個別に筆者が行い、かかった時間は一人あたり平均1時間30分～2時間程度であった。

③ 調査内容

インタビューガイド（表1参照）を用いて回答を得た。本人の自発的な語りによる自然な流れを重視したため、インタビューガイドにある質問項目以外にも出てきた対象者の語りも分析対象とした。質問会話の内容は、録音した音声ファイルをもとに逐語語録を作成してデータとして使用した。このほか、基礎資料として、今までの職務経歴、現在の職業など個人の属性に関する情報も収集した。

【表１ インタビューガイド】

【インタビューガイド】

1. 創立者に関する質問

- a. 創立者の（生徒や教職員に対する）言葉かけなどで印象に残っているものがありましたら、教えてください。
- b. 学園生と創立者との絆について教えてください。
- c. 創立者との心に残るエピソードがあれば、教えてください。
- d. 女子生徒と男子生徒とに対する創立者の指導や接し方などについて、違う部分があれば教えてください。
- e. 創立者のスピーチで、今も覚えていらっしゃるものがあれば教えてください。

2. 当時の創価女子学園についての質問

- a. 開学当初の生徒について、教えてください。
- b. 姉妹の連帯と言われる、生徒同士の人間関係はいかがでしたか。

3. 教員として感じたことについての質問

- a. 教員として感じたことがあれば、教えてください。
- b. どのような思いで教育にあたられていましたか。

4. 女子教育についての質問

- a. 女子校で教えるにあたって、男女の違いを感じられましたか。
- b. 女子教育の良さを一言でいうと、どのような面にあると思いますか。
- c. ご自身の幸福観（何が幸福なのか）について教えてください。
- d. どのような女性を目指すべきかについて、創立者は指針をくださったと思いますが、それについて教えてください。また、ご自身が考える理想の女性について教えてください。

④ 倫理的配慮

対象者には、調査への協力を依頼するにあたって、研究の目的及び方法を明示したうえで、研究への参加・辞退は自由意思によるものであること、答えたくない場合は答えなくてもよいことを伝えた。さらに、データは個人が特定されないよう処理し、データおよび録音したファイルは厳重に保管しプライバシーの保護を厳守する旨を明記した調査依頼書を渡し、口頭での説明をおこなったうえで、調査協力の承諾を得た。

⑤ 分析方法

データ分析においては、対象者が語ったライフヒストリーをもとに、語りの部分を作成した。「語り」に関しては、インタビュー後、対象者の意向をふまえて加筆・修正をおこなった箇所もある。分析方法については、去年の富岡論文⁽²⁾を参照のこと。

2. 結果

対象者の背景

調査対象者は以下の2名である。

- ・ Aさん（60代女性） 創価女子学園開学当初より国語科教諭として勤務。その後、東京の創価学園に転勤し、41歳のときに退職。以後、専業主婦を経て現在に至る。
- ・ Bさん（60代女性） 開学した昭和48年度の3学期より家庭科の教諭として勤務。その後、東京の創価学園に転勤し、教員として定年まで勤めた。

① 創立者について

インタビューでは、草創期の創価女子学園についての話がテーマであったが、その中で特に創立者の存在について、学園の創立、開校への関わり方や生徒への働きかけについて多くの語りが見られた。また、対象者自身が創立者をどのように見ていたのかについても意見を伺うことができた。

a. 創立者の言葉かけなどで印象に残っているものがありましたら、教えてください。

ここでは、実際に対象者が創立者の話を身近に聞いたり、創立者に話しかけられたエピソードなどを語ってくれた。そこには、『創立者とともに』⁽³⁾などに収録された公式の創立者のスピーチとして掲載されていないものも含まれる。

「（創立者は）生徒にも教員にも、一人ひとり、生活の状況を聞かれたり、家族のことを聞いたりしてくださいました。特に女子生徒が自発的に訴える心配ごとや悩みなどを聞いてくださったり。たとえば、両親がうまくいっていないとか、病気であるとか、自分自身の悩みとかを、率直に先生にご報告していた。先生は、まっすぐに聞かれて、『大丈夫だよ、祈ってあげるよ。心配ないよ』など、優しく、時には厳しく御指導され、励ましてくださった。」（Aさん）

Aさんは、何度も「先生は一人ひとりを大事にして、励まし続けてくださった」と、創立者の学園生への細やかな心遣いや思いやりについて述べている。教員の目から見ても一創立者としての池田のふるまいは「創立者が自らそこまでしてくださるのか」と、驚くべきものだったのであろう。

また、生徒に対する教員としての心がまえについて、以下のような指導を受けたとしている。

⁽²⁾ 富岡比呂子「池田大作の教育思想—女子教育の観点から（2）—」、18頁。

⁽³⁾ 「創立者とともに」編集委員会 編『創立者とともに』学校法人創価学園、1982年。

「先生がある生徒（規則を守らない子ども）をご覧になって、『いろんな子がいるね。でも、どんな子がいても、驚いちゃいけないよ』と言われました。まず、すべてまっすぐ、受け入れて理解する。そのうえで指導していく。教師の側が、はじめから驚いて拒否してしまったら、何も始まらないということですね。『どんな子がいても驚いちゃいけないよ』ということは、教育者としての大切な腹がまえを教えて頂いた大事な言葉だと思います。」（Aさん）

どんな生徒でも、温かく受け入れる勇気と覚悟を持たなければならないという教員としてのあり方について一つの指針を与えているといえる。また、学園生に対して、「常に明るくあれ」という指導があったので紹介する。

「ある人には『明るい方向へ考えるんだよ。暗い方向に考えると、命にカビが生えるよ。明るい方に考えるんだ、太陽の方を向くの！』とおっしゃいました。一人ひとり、先生からまっすぐ見つめられて、愛情あふれる心をかけて頂いたのです。こうした経験は、一人の人生を劇的に変えるほどの意味を持つと思います。指針そのものの力と共に、この嬉しい経験こそが、良い時も悪い時も、自身を正しく向上へかちたてていく大きな原動力になります。愛されて大切にされた女性は明るい顔になります。」（Aさん）

「明るく」という指導は、創価女子中学・高校創立五周年記念式典の「太陽のような明朗さで福運を」というスピーチにも表れている。池田は、「願わくは、私は皆さん方には、偉大なる生命の船舶に福運をつんで、人生の航行をしていつていただきたいのであります。そのためには、何が必要でありましょうか。それは、明るく太陽のような満々たる生命力と、明朗な笑いと、ふくいくたるわが青春の財産をはぐくんでいくしかありません。」⁽⁴⁾と述べており、明朗さが女性にとって大事であると強調している。

また、父と娘の絆という点において以下の語りがみられた。

「はじめは生徒も『先生、先生』とお呼びしていましたが、入学式に、『娘にしてもいい？』と先生がおっしゃって。生徒は、『お父さんと呼ばせて頂いてもいいですか？』という思い。最高に尊敬する師匠であって、本当に自分のことを思ってくれる父の存在。目の中に入れても痛くないほどかわいがってくださる先生の存在が、生徒一人ひとりを喜びで明るく朗らかにしたと思います。」（Aさん）

「東京（学園）は師弟を表に出すと思うんですが、関西は父娘。『娘にするよ』と先生がおっしゃってからは、先生が学園にいらっしゃるときは『おかえりなさい』のたれまくが。『ご来校』ではない、『ご帰校』ですものね。」（Bさん）

学園生が創立者のことを父のように慕っている様子については、筆者が去年の論文で言及しているが⁽⁵⁾、池田も学園生を実の娘のようにかわいがり、慈愛を込めて接していた様子がうかがえる。池田の執筆した『新・人間革命』は、創価学会の歴史を池田の活動を中心に小説の形で記したものであるが、その中の「希望」の章は、創価女子学園の設立から開学にかけての話が中心

⁽⁴⁾ 「創立者とともに」編集委員会 編『創立者とともに』、246頁。

⁽⁵⁾ 富岡比呂子「池田大作の教育思想—女子教育の観点から（2）—」、31頁。

になっている。創価女子学園の入学式の場面で、以下のやりとりが出てくる（池田は、小説の中の役名で「山本伸一」となっている）。

創立者の伸一が登壇し、祝辞を述べた。

彼は、開口一番、自分の気持ちを、そのまま口にした。

「さっきから皆さんのことを見ていて、かわいくて、かわいくて、仕方がないんです。今朝、妻に『うちは男の子しかいないから、全員、娘にしたいな』って言ったら、妻も『そうしたいですね』って言うんですよ」

「わー」という歓声があがった。入学式に緊張して臨んでいた新入生たちは、まるで家族に語りかけるような伸一の第一声に、ほっとした⁽⁶⁾。

Bさんは、関西女子学園に着任する前に聖教新聞社に勤務していたが、関西に行くことになった時の話を語ってくれた。

「関西に行くにあたって（東京を離れるということで）少しさびしい思いがしたんですが、あるとき先生にお会いする機会があったんです。先生は、『教育はぼくの最終の事業だ、生涯かけてやる事業なんだ。一緒にやろうよ』と言ってくださった。これが私の教員としての原点です。次に、第一回希望祭のときに呼んでくださって、食堂の厨房で面接をしたんです。そのときのお言葉が『家庭が大事だよ』というものでした。家庭科の教員として、この言葉はとても大切にしなければならぬと思っています。」（Bさん）

Bさんにとっては、このときに池田からかけられた言葉が、自身の生涯をいわば決定づける原点になったと語っている。教育を最終の、そして最大の事業と位置づけた池田の構想に少しでも貢献したいというBさんの思いがうかがえた。池田は、小説『新・人間革命』において「教育は、わが生涯の最後の事業である。人類の未来のために、人間教育の大河を断じて開くのだ！」⁽⁷⁾と前述の「希望」の章の冒頭で述べている。また、東京の創価学園が開学して2年目の昭和44年（1969年）の第2回栄光祭のスピーチでも、「私の本命は、つまり人生の根本の総仕上げは、21世紀に誇る指導者を作ることです。その方法は教育しかありません。その教育に全魂を打ち込んでいくのが、私のこれからの一切の仕事です。」⁽⁸⁾と、教育の重要性をうたえており、池田の人材育成にかける思いの深さを感じることができる。

b. 学園生と創立者との絆について教えてください。

次は、学園生と創立者との絆やつながりについてである。前述のAさんの語りでは、「一人ひとりを励ます創立者」という言説が出てきたが、ここでも同じような語りが見られた。

「一人一人が先生から（激励を）していただいて、愛情を受けて、大事にされて。本当にたくさんの生

⁽⁶⁾ 池田大作『新・人間革命』第17巻、聖教新聞社、2007年、130-131頁。

⁽⁷⁾ 池田大作『新・人間革命』第17巻、104頁。

⁽⁸⁾ 「創立者とともに」編集委員会 編『創立者とともに』、131頁。

徒、本当に全員と言っていいほどの生徒に対して（先生が）声をかけてくださっている。卒業してその後の長い人生で『みんなが尊敬する池田先生、私が尊敬する池田先生が自分のことを期待して見つめてくださっている』という実感を持ち続けています。これはすごく大きいことです。自分のことをも見守ってくださっている先生にお応えしたい、だから努力しよう、頑張ろうと、前向きに生きることができる。裏表なく自分を律して成長する。どこにいても、そのことを思うと、にっこりしてしまうほどの力ではないでしょうか。生徒と先生の絆には、深い縁がもつともつとあろうかと思いますが、そういうふうに感じられます。世界広布の大展開の闘いのなかで、先生のお時間のご都合を考えると、本当にありえないくらい学園に心血を注いでくださった時期だったと思います。まさに『奇蹟の女子学園』と呼びたいくらいです。」（Aさん）

「創立者は一人一人を見つめてくださった。全体でのご指導も一人ひとりの心に光をともしてくださいましたが、一人ひとりにも別々に。このまなざしが生徒にとっては宝。私自身にとっても、同じです。先生の慈愛のまなざしが、どんなに自分が、陰日陽なく一途に正しい人生を生きていく最高の力になったか、感謝しつくせません。」（Aさん）

この語りからは、一人一人の生徒に向けられた創立者のまなざしや、その創立者の存在がいかに生徒のその後の人生に影響を与えるのか、また、自分を見つめ、応援してくれる人がいることが、どんなにその人の支えになるのかという点が読み取れる。開校時は池田も1年のうちに何度も学園に足を運んでおり、心血を注いで学園建設に携わっている様子が『希望の乙女』や『新・人間革命』からも見る事ができる。また、教員であるAさん自身にとっても、創立者の存在が大きな支えになっていることがうかがえた。

また、創立者と学園生のやりとりについても、以下の語りがみられた。

「先生は全力投球でいらした。生徒のいる時も、帰ったあとにも、校内を歩かれて、生徒たちが困ることとはないか、危ないところはないか、見て回られました。そんな中で、希望祭のはりがみに手を加えられたことがありました。そういう細かいところも、先生が生徒の気持ちを受け止めて、表現して、それをまた生徒が見て喜ぶ。そうした心の交流が随所にありました。」（Aさん）

この希望祭のはりがみの話は、文集『希望の乙女』に生徒の作文として掲載されている。希望祭の設営に携わった長谷川久美さん（高2）は、『希望祭まで〇日』の幕について、「二週間ばかり前から始めた『希望祭まで何日』の幕も取りはずす予定であったにもかかわらず、希望祭前日の夜、創立者が校内をまわられ、その折に『“今”を入れて“希望祭まで今日”にしよう』と提案してくださったのである。創立者の真心に触れ、——ああ、よかった、やり抜いてよかった——という感激と、池田先生はだれよりも私たちの苦勞を知っていてくださるという実感がズシンと胸にひびいた。」⁽⁹⁾と記している。ここから、陰の立場で頑張る生徒にも、細やかな励ましを送る創立者の真心を感じることができるであろう。

「寮の見学に行かれた時、『希望』の章に出っていますが、（創立者が）生徒の親と電話で話してくださ

⁽⁹⁾ 創価女子中学校・高等学校希望の乙女編集委員会 編『希望の乙女 創価女子中学校・高等学校一年のあゆみ』、創価女子中学校・高等学校、1974年、72頁。

たことがあるんです。本当にみんなが心配ないように、心をくだいてくださった。生徒の要望や状況に
対してきちんと応えてくださり、全部具体的な指示になって帰ってくる。たとえば、夜食の激励など。
また、それに対して生徒が一つ一つ先生の激励にこたえていく。お礼のお手紙を書いたりとかですね。」
(Bさん)

これは、『新・人間革命』に出ているが、池田が生徒寮である月見寮に足を運んだ折に、ちょう
ど寮生の母親から電話が入り、電話で話す場面がある。

月見寮で伸一は、寮生に菓子をプレゼントし、女学校で寄宿生活を送った偉人たちの話などをしながら、青春時代の苦労は未来の財宝であることを語った。

また、日夜、寮生の健康を気遣い、面倒をみってくれる管理人夫妻の部屋にも立ち寄り、感謝の思いを
伝えた。

その時、管理者室の電話のベルが鳴った。

伸一は、素早く、受話器をとった。

「はい、月見寮です。山本でございますが、どうも初めまして……」

「はあ、山本さん？」

中学生の寮生への、母親からの電話であった。

この母親は、いつもと様子が違うことから、一瞬、戸惑いを覚えた。

だが、二日後に「希望祭」が迫っているので、“きっと創立者の山本先生が訪問しているのだろう”と
思った。

「……あつ、先生！こちらこそ、娘が大変にお世話になります」

伸一は、管理者に、その寮生を呼びに行ってもらった。

その間に、彼は母親と話をした。

「今は、お母さんも寂しいでしょうが、娘さんは一生懸命に頑張っておりますよ。創価女子学園は最高
の教育をしています。この恵まれた環境で学んだことの意義は、40代、50代になった時にわかります。
安心してお任せください」

彼は、母親の不安を取り除きたかった。安心があれば、元気が出る。力がわく。ゆえに不安を取り除
くことこそ、リーダーの役目である⁽¹⁰⁾。

ここには、生徒を学園に送り出している一人の母親に対しても、誠実に対応しようとする創立
者としての姿勢がうかがえる。また、どこまでも一人の人を大切にしようとする池田の人間性が
反映された場面であるといえよう。

c. 創立者との心に残るエピソードがあれば、教えてください。

「大学を卒業してから4年半、(創価)学会本部・聖教(新聞社)の職員として、又、組織幹部として、
先生のお側に呼んで頂くことも多く、直接、沢山のご指導を受け、薫陶を頂いた。その経験や感動、実
感を、率直に生徒に語りました。生徒からも聞かれました。」(Aさん)

Aさん自身が創立者について感じたことについて、生徒にも語っていたことがうかがえる。こ

⁽¹⁰⁾ 池田大作『新・人間革命』第17巻、189—190頁。

のことは、生徒にとっても身近な教員を通して創立者を知るいい機会になっただろうと思われる。

- d. 女子生徒と男子生徒とに対する創立者の指導や接し方などについて、違う部分があれば教えてください。

これは、女子生徒に対する指導に、何か男子生徒に見られない特徴があるのかを問う質問である。

「（男子生徒に対する指導との違いについては）女性が幸せになっていくという視点で（先生は）見ていらっしゃるのではないのでしょうか。今は親孝行が一つの主眼、人間としての根本になっているのでは。『他人の不幸の上に自分の幸福を築くことはしない』という言葉は、女性の生き方として本当に大事なことだと思います。また、そのことを知っている人、こだわる人にしか言えない。なので、私はそのご指導については東京（学園）に来てからも、生徒に機会があるごとに話していました。」（Bさん）

「教育の目的は社会に貢献できる人を育てることにあると思いますが、『他人の不幸の上に自分の幸福を築くことはしない』という女子学園の根幹の指針ほど適切な教育モットーはないと思います。他人のことを思いやる心、他者を自分と同じように幸福にしたいとの思いやり、他人の心の痛みがわかる人間性を涵養するのに、これほどわかりやすい、身につく指針はないと思う。他者の不幸の上に自己の利益を得たり、その最たるものは戦争でしょうが、人の迷惑をかえりみない、いやな人間、わがままをふりまわすようなことに歯どめをかける力となる。他を害していることを最大悪ととらえる人間形成を促す。女子学園をすばらしい女子教育の府たらしめた一番の力だと思います。」（Aさん）

「他人の不幸の上に自分の幸福を築くことはしない」という言葉⁽¹¹⁾は、去年の論文でも多くの回答者が印象深い言葉としてあげていた⁽¹²⁾。女性として生きていくうえで「幸福とは何か」を考えたときに、卒業生だけではなく、教員の視点から見ても、この言葉に重要な価値を見出していることがわかった。特にAさんはこの言葉を女子学園の根幹の指針としてあげている。

また、男女に共通してのご指導として以下のものがあつた。

「（創立者は）以前から、教育を受けた人は教育を受けられない人を幸せにするためにあるんだという点を強調されていました。草創の頃の男子校の式典に招待された時にも、戦争で攻められたとき、ある病院でインテリが先に逃げた話をされて、先生は、それはとんでもない！という話をされた。高等教育を受けたインテリはみんなを守るためにある。それを我先に逃げるなんて、と厳しくおっしゃられた。それがすごく印象に残っています。」（Aさん）

このAさんの語りから、池田が単なるエリートではなく、人のために尽くすリーダーを志向していたことがうかがえる。また、第10回創価学園の入学式においても「とにかく私の願いは、諸君たちが、次の時代を担って立つ、力ある偉大な庶民のリーダーに成長していただきたいということ、ただそれのみであります。諸君たちが、大きく世界に雄飛する日を、私は一日千秋の思いで待っております」⁽¹³⁾と強調しており、どこまでも社会のため、人のために貢献するリーダーを

⁽¹¹⁾ 「創立者とともに」編集委員会 編『創立者とともに』、225頁。

⁽¹²⁾ 富岡比呂子「池田大作の教育思想—女子教育の観点から（2）—」、28—29頁。

⁽¹³⁾ 「創立者とともに」編集委員会 編『創立者とともに』、79頁。

求めていたことが読み取れる。

e. 創立者のスピーチで、今も覚えていらっしゃるものがあれば教えてください。

Bさんは、入学式のスピーチをあげている。

「私は（まだ教員として着任していなかったんですが）入学式に参加させていただいたんです。今読み返しても5つの指針はすごいですよね。伝統。何にもないところから自分が先生の絵を、ご構想を描いていくんだという思い。あと教養、しつけですね、家庭科に関することといえば、『しつけを嫌ってはいけないよ』と。その意味では教員に対する信頼感はすごかったと思います。まだ全学年そろっていなかったですし、職員室も教室もガラガラ。その中で、創立者が一つ一つ徹に入り細に入り入ってくださった。この入学式の5つの指針と、『他人の不幸の上に自分の幸福を築くことはしない』という言葉でしようか。」（Bさん）

第1回入学式のスピーチにおける「伝統」「平和」「躰」「教養」「青春」という5つの指針⁽¹⁴⁾は、その後の女子学園を支える精神的支柱の一つとなったと考えられる。

② 草創期の創価女子学園

a. 開学当初の生徒について、教えてください。

これは、どのような生徒が入学してきていたかについての質問である。Aさんは、生徒たちが非常にのびやかであったと以下のように語っていた。

「（生徒たちは）みなすごく生命力が強いというか、臆することが少ない。人目を気にしないで、伸びのびと自分を表現できる。集まるとよく、どっと笑っていました。自分を疑っていない友人がたくさんいる、そういう豊かさをみんな持っていてうらやましいぐらいでした。人間にとってそういうのを豊かさというのではないのでしょうか。だから一人になっても孤独ではない。そういう人間関係、強い絆がありました。その絆の中に私たち教員も入れてくれたことは、嬉しかったですね。今でもです。」（Aさん）

ここから、当時の学園生たちが強い友情の絆で結ばれ、またそれが心の豊かさにつながっているとの解釈がうかがえる。また、入学式の誓いのことばを読んだ生徒について、以下のように語っている。

「中学1期の上杉さんが入学式のとき、誓いのことばを俳句でしめくくったんです。『万葉の／花も喜ぶ／入学式』『師のもとに／いのちはもえる／女子学園』小学校を卒業したばかりの生徒が作ったのはすごい。（教員が）教えたんじゃないんです。後年、『希望』の章を読み返して、あらためて、本当にすばらしい生徒たちだったと感嘆しきりでした。何てすばらしい表現力、感性だったことか、と。」（Aさん）

一人の生徒の例ではあるが、Aさんは彼女の文才や創立者に対する思いを非常に高く評価している。実際の誓いのことばを読んだときの様子は、上杉孝子さんの作文として『希望の乙女』に

⁽¹⁴⁾ 「創立者とともに」編集委員会 編『創立者とともに』、222-231頁。

も掲載されている⁽¹⁵⁾。また、この2つの俳句については、小説『新・人間革命』の「希望」の章にも掲載されており、池田はその誓いのことばに拍手を送りながら「ありがとう。忘れません。清らかな心が、胸に染み渡ります。私は、皆さんをわが娘として、また、最高の宝として、生涯、見守っていきます」⁽¹⁶⁾と綴っている。

b. 姉妹の連帯と言われる、生徒同士の人間関係はいかがでしたか。

「これはもうすばらしい連帯でしたね。対立関係なんてない。何もかも全部一緒にやる。助けあっていました。『お姉さん、お姉さん』と中学生は慕っていた。（学園に来るまでは）足のひっぱりあい、いじめまでではないにしても、好き嫌いによるグループの対立くらいあるのかなと思っていましたが、学園にはグループの対立とか、ケンカとかいじめとか、全くなかったですね。みんな仲がいい。思いやりにあふれていました。（高校生は）中学生を可愛がっていました。」（Aさん）

「先生を中心とした連帯が普通のものになっている。先生が教えてくださったことを一人一人やっていく、生徒同士が話し合ったりして仲良くなる。」（Bさん）

去年のインタビューでも、学園生同士の人間関係が非常に美しい友情の連帯であったことが指摘されていたが⁽¹⁷⁾、生徒だけでなく教員も同じことを感じていたことを示唆する語りだといえよう。池田は、創価女子学園の第一回卒業式において友情についてふれている。中学、高校の3年間をこの学園で努力してきたことについて「しかしながら、その努力はけっして自分一人だけでしたわけではありません。つらいときには励まし合い、楽しいときには手を取って喜び合い、大勢のクラスメートが、そうした友愛の連帯の中で努力を成功に結びつけつつ、成長してきたのでありましょう。すなわち、得がたい友達であったわけであります」と述べ、「人生においては人間性、人格、そうしたものがなによりも大事だということ、それを観念ではなく互いのふれ合い、体験を通して身をもって会得できたことは、これは本当にすばらしいことであると思うのでございます。そういう尊き学友同士であります。ひとつ、理屈ぬきで、生涯の友としての美しき信義を貫き通していただきたいと思うのでございます。信ずるということ、信頼するということ——これこそが人間にとっての大いなる力である。私はこれを卒業のはなむけとして、皆さんにお贈りするものであります」と結んでいる⁽¹⁸⁾。また、第8回入学式においても『友人は第二の自己である』という有名な言葉があります。また『友人を見れば、その人のことがわかる』ともいわれています。良き友人を持つことが、どんなに大切なことかを示している言葉です。友人を作り、友人と心から交わっていくなかに、自分自身が磨かれ光り輝いていくことでしょう。」と述べている⁽¹⁹⁾。ここから、池田が学園生同士が生涯の友としての連帯を築いていくことを創立者と

⁽¹⁵⁾ 創価女子中学校・高等学校希望の乙女編集委員会 編『希望の乙女 創価女子中学校・高等学校一年のあゆみ』、84-85頁。

⁽¹⁶⁾ 池田大作『新・人間革命』第17巻、127頁。

⁽¹⁷⁾ 富岡比呂子「池田大作の教育思想—女子教育の観点から（2）—」、33頁。

⁽¹⁸⁾ 「創立者とともに」編集委員会 編『創立者とともに』、240-241頁。

⁽¹⁹⁾ 「創立者とともに」編集委員会 編『創立者とともに』、255頁。

して強く願っていること、また信頼というものを人間関係の基本として、そこに大きな価値を置いていることがわかる。

③ 教員として感じたこと

a. 教員として感じたことがあれば、教えてください。

これは、当時教員として勤務するにあたって、学園のこと、創立者のこと、また生徒のことをどのように見ていたのかについての質問である。

「私自身は高校からずっと女子校なので、女子校勤務は全然違和感がなかった。教員生活も女子校から始まったんです。先生がすべてのことを共にしてくださった、最初の2学期間いなかったの、3学期になって自分が入った時に、生徒がすごく大きく見えた。自分が共有していない9カ月があったから、何だか生徒たちが先輩に見えて、教壇に立つのが震えてね。今でも、『新・人間革命』の『希望』の章を読み返すと、彼らは本当にすごかったんだなって。」(Bさん)

「あの当時(開学時)、私自身は30歳くらいでしたが、13歳くらいの生徒が先輩に見えた。まずは(彼女たちから)学ぼうという決意でした。」(Bさん)

Bさんが教員として着任する前、新入生として入学した生徒が4月から12月までの期間にとっても成長していると感じられた点について語られている。「希望」の章でも、開学時に創立者が教職員や生徒を直接激励するなど、学園建設に心をくだしている様子が描かれており、それはたった9カ月ではあるが、生徒たちにとっては充実した密度の濃い時期だったと考えられる。またBさん自身の、教員であるにも関わらずそうした生徒から学ぼうという謙虚で向学心にあふれた姿勢がうかがえる。

b. どのような思いで教育にあたられていましたか。

「先生の理想の女子教育を体現する教育場なんだと思っていました。思いやりのある、哲学、良識をもった女性をめざす。ある意味、りりしい女性を育てなければ私は思っていました。りりしいというのは、自分の幸せだけでなく、人々の幸せのために立ちあがっていくような毅然とした心のある姿だと思う。りりしい女性でないと、りりしい子供を育めないのではないのでしょうか。そういう大きな優しさをあわせもった女性を育てなければと思っていました。先生は細かいことよりも、『どんな立場になっても、聡明で、人々の役に立つ、明朗で気品があって優しく、そういう人になりなさい』とおっしゃっていた。将来像も、こうでなくてはならないというおしつけはなかった。どんな人生の選択もできるようなカリキュラムを学園では考えていたと思います。」(Aさん)

Aさんは、「りりしい女性」を育てたいと何度も語っていた。また、優れた女性を育てることは(その女性が母になり、子育てをしていく中で)、ひいては優れた男性を育むことにつながるという意味で、女子教育自体が人材育成の布陣ともなったのではないかという見解を述べており、これは単に3年間、6年間だけの女子校での教育ではなく、その人の将来を見据えた教育を創価女子学園においておこなっていることを示唆するものと考えられる。また、理想の女性については

後述するが、「思いやりのある、哲学、良識を持った女性」「明朗で気品があって、優しい人」といった観点がみられた。

「先生の思いが学園のいたるところ、どこにでもあふれている。人を育てるとはこういうことなんだと、いつも学ばせていただいていた。もし先生だったらどうされるか、といつも考えていた。」（Bさん）

この語りからは、創立者と同じ思いで生徒一人一人と接することを心がけたとあるように、創立者と同じ教育者としての視点を持つことの志向性が見出された。

④ 女子教育について

対象者は二人とも女子校及び共学校での教職経験がある。それをふまえたうえで、女子を教育すること、また女子教育ならではの良さについてたずねた。

a. 女子校で教えるにあたって、男女の違いを感じられましたか。

これは、実際に男女両方を教えてみて、違いや共通点を見出すことができたかについての質問である。

「女子の特性は、水の流れが岩にあたって曲がるように強いものに会おうと心が動いてしまう、と言われるとおり、他の影響を受けやすい傾向があると思った。なので、環境も大事であるし、しっかりした考えを学んで、柱になる哲学・考え方を持つことが必要であると思う。女子校から男子校に転勤してみて感じたことは、男子生徒は自分に自信があるのかもしれないが、あまり人がどう考えているのか、どう思うのかについて、無頓着な生徒が多いように感じられた。（男子が）心が揺らがらないことは美点の一つなのかもしれません。」（Aさん）

ここでは、精神面において男子の方がしっかりしている点、また女子が縁に触れて紛動されやすい側面もあげられている。これは、教員から見た男女の特質の違いと言えるであろう。

「男女は成長期が違う。男子は激しく変わる。心の面でも中学は特に大きく変わる。でもそこを過渡期というふうにとらえれば、大丈夫だと思います。（中略）男子の場合には反抗期がきっちり出るので、その際の自分の接し方の反省点はたくさん見つけることはできます。」（Bさん）

Bさんの語りからは、発達段階から男女の差をとらえていることがうかがえる。30年に及ぶ教員生活の中で、どちらかという中学での教員経験の方が多かったBさんは、特に中学時代の生徒の身体的および精神的発達に着目することができたのであろう。また、女性教員として男子への適切な接し方に配慮している様子がうかがえた。

b. 女子教育の良さを一言でいうと、どのような面にあると思いますか。

女子教育の良さについては、以下の語りが見られた。

「女子しかないのです、何の行事も自分たちで発想して自分たちで行う、人に頼らない、自立心が養われたと思う。自分に負けない力。幸福になっていくのにも、だれかに幸せにしてみらうのではなく、自分で幸福になっていく力が必要ですね。女子教育とはこれを持たせようという教育だったと思う。みんなで重いものでも運ぶ。力仕事も、誰もやってくれないし、やってもらおうという気もない、すごいですね、この自立心は。男子がいたらこうはいかない。その意味では、彼女たち（女子学園生）の姿は素晴らしいかった。全部自分たちでやった。男性の先生方も一生懸命でした、本当に大変だったと思いますが。」（Aさん）

「学園時代、人手は女子しかない。大工仕事や警備、設営するにしても。自立心をもって自分たちでやらなければならない、そしてやれてしまう、という感じ。あと、女子だと『女子の問題』について話し合えるというのがありますね。たとえば『女性の生き方』についてしっかり話し合うとか。こういう生き方をしていくべきなんじゃないか、とか先生のご指導を読みながら話す、後輩が入ってきたら話して聞かせるなど。」（Bさん）

Aさんの語りからは、「自立」「自分で幸福になっていく力」「負けない力」という観点が見出された。Bさんの語りからは、自立心とともに、女性の問題について語り合えるというメリットについて指摘があった。去年のインタビューでも、「自立心や主体性の育成」や「友情の連帯」「対話の精神の育成」という観点が見られ⁽²⁰⁾、ここでも教員と卒業生の間に、見解の一致する部分を見出すことができた。

c. ご自身の幸福観（何が幸福なのか）について教えてください。

「どういうものを幸福というのか、ということですね。何があっても自分で、幸福になる力をもって築いていくものだと思います、自分自身が。自分の存在は人々の間で手ごたえがある、必要とされていると感じることができる。そのこと自体が幸福ですね。他人のために生きていく、人のためになる生き方をする、幸福はその積み重ねの上でできていくものだと思います。環境に左右されるのではなく、幸福を感じるのは自分の命の力だと思います。花が咲き、木の実がなる木がある、おのずとその下には道ができる。結婚する時も娘1人にお嬢さん1000人、そういう女性になるんだよ、と御指導されたこともあります。外面も内面も魅力ある女性に。そういうふうに関心を鍛えていく、努力していく。そういう女性になるんだということだと思います。一生、思うようにならないことやつらい経験をのりこえて、幸福を満喫できる自身にきたえあげていくことができれば、つらかったことも含めて幸福な一生といえるのだと思う。」（Aさん）

Aさんの語りからは、前述した「自分で自分を幸福にする力」という観点が見られた。人に幸福にしてみらうのではなく、自分で自分を幸福にする力が重要だということなのであろう。また、「他者から必要とされること」「他者のために生きること」とあるように、幸福の条件として他者との共存関係や共感というものが指摘されている。また、幸福という観点からみた理想の夫婦について、以下のような語りが見られた。

「御夫妻の絆について以下のように先生が語っておられます（ワヒド元大統領との対談集）。『師匠の

⁽²⁰⁾ 富岡比呂子「池田大作の教育思想—女子教育の観点から（2）. 一」、33頁。

心をわが心として戦ってきた私の真実を、最もよく知ってくれているのは妻。その妻の誠実さ、けなげさを一番わかっているのは私。』私はこの一節を読んで、本当に感動しました。このような絆の中に人間の最高の幸福があると思いました。自分が人に恥じない、本当に価値のある、もっとも手ごたえのある人生を悔いなく生きたかどうか。そしてそのことを本当に理解し、共に力を尽くしてくれる人がいてくれれば、この上ない幸せなのだと思います。素晴らしいと思いました。」（Aさん）

これは、インドネシア共和国の元大統領であるワヒド氏と池田の対談集に掲載されている。夫婦の絆についてワヒド元大統領夫妻が、お互いによく理解し合っているという話を受けて、池田は以下のように語っている。「大事なのは『理解』であり『信頼』ですね。私たち夫婦にとっても、心から共感できます。師である戸田第二代会長の心を、わが心として戦ってきた私の真実を、最もよく知ってくれているのは妻です。また、妻の誠実さや健気さを最も知っているのは私であると思っています。生ある限り、人々のため、社会のために貢献しよう——そうした信念を共有し合うなかで、歳月とともに深まっていくのが、夫婦の絆ではないでしょうか。」⁽²¹⁾。Aさんは、夫婦としてお互いを理解し合う人間関係を持てることが幸福であると述べており、幸福かそうでないかを判断するうえで、他者との関係性がどのようになっているかがひとつの重要な要素となることがうかがえる。

Bさんは、自身の幸福観について以下のように語っている。

「私の幸福観はどんどん変わっている。観念でわかっているけど、進んでいく、勝っていく、負けないことが大事。苦難がない人生なんかない。戦いがあればあるほど幸せなんだというのを先生はおっしゃっている。その意味からいうと、一人一人が乗り越えていくこと。自分の主義、先生への誓いを貫き通すということ。周りを巻き込みながら、また周りに負けないで。そういうことが大事なんだろうなと思います。あれがあったから幸せ、これがあったから不幸というのは人生の一環ではあっても、根幹ではない。」（Bさん）

Bさんは、「負けないこと」が大事と主張しており、何かの出来事それ自体が幸不幸を決定づけるものではなく、人の心、また生きる姿勢が大事なのだとしている。これは、どこまでも人生を強く前向きに進んでいくことの重要性を示しているのではないだろうか。

d. どのような女性を目指すべきかについて、創立者は指針をくださったと思いますが、それについて教えてください。また、ご自身が考える理想の女性について教えてください。

「（女性の生き方について）蜚会のご指導はありましたが、女性はこういう生き方でなければならない、と枠にはめるようなご指導というのはなかったように思いました。学園は当時文系4大に進学できるカリキュラム。それでも理系に進んだ人もいたようです。創大中心に、自由に飛躍していけばよいと皆思っていました。先生のご指導は、『どんな立場になっても、本当に世の中のため、人のために尽くしていただける人間にならなさい』。雑誌『希望の乙女』にもありましたが、『たとえおでん屋のおばさんになって

⁽²¹⁾ アブドゥルラフマン・ワヒド、池田大作『平和の哲学 寛容の智慧—イスラムと仏教の語らい—』、潮出版社、2010年、100頁。

も、みんなのために尽くす人になりなさい』と、『希望』の章にも載っている。『願ったことは、庶民のリーダーたれ』ということだと思います。」(Aさん)

ここでは、庶民のリーダーという観点と、相手の立場に立つことのできる心遣いという観点があげられている。『希望の乙女』の高橋久恵さん(高2)の作文では、東京学園の栄光祭に参加したときの会食会での話が記されている。抜粋すると「その席上、創立者は『偉くなる必要はない。たとえおでん屋をしてでも、一人の人間を救っていくことが最も偉大なことです』また『実践をしない者が、実践をしている者に対して、批判することは許されない』とのお話をされました。このお話は、私の心に今までにないくらいにグサリと深く突きさりました。私達は単にエリートになってはいけないのだと、強く感じました。」⁽²²⁾となっている。これは、「一人の人間のために尽くす、庶民のリーダー」という池田の持つひとつの女性のあるべき姿を示唆しているものとみることができるであろう。

「3つのモットーですけど、『良識・健康・希望』ですね、その中で『希望』を失わないことがどんなに女性にとって大事かということ、あとになればなるほど実感します。どんな苦しい悲しい時でも希望を失わなければ、負けることはない。健康であればそれだけで幸せです。健康が失われれば、苦しまなければならない。周りの人にも心配や迷惑をかけてしまう。どんな人と会っても恥ずかしくないように、聡明で良識のある、自信のある一人になることが大事。幸せな人になるためには、希望が一番大事だったと私は思います。」(Aさん)

「(どのような女性を目指すべきかについて)(フランス人形の)園子ちゃん。あと希望の乙女、負けないう乙女。一流の女性に。希望、気品、品格、明朗さ、健康。内面においては良識、品格のある、魅力のあふれた女性を目指すなさいということだと思います。知性も含まれる。知性と福運ですよ。」(Aさん)

「モス子ちゃん、園子ちゃん人形。希望の乙女の像。やはり(創立者は)女性の幸せというものを考えておられたと思う。幸福についての価値観、こういうふうに生きていきたいという理想の女性の幸福。それは奥様みたいな生き方って思っていますけどね。」(Bさん)

Aさんは、理想の女性を語るうえで、良識・健康・希望の3つのモットーをあげているが、中でも希望を重視しているのがうかがえた。希望については、池田も第7回創価女子中学・高校入学式で「女子学園のモットーの一つは『希望』であります。有名な言葉に『希望は永久に人間の胸に湧く』とあるように、どんなことがあってもくじけずに、前途に希望を生み出していける人が、人間としてもっとも尊い人であります」⁽²³⁾と述べており、人生において希望を持続けること、また希望を生み出し続けていくことの重要性について強調している。

また、内面的な要素として「気品や品格」「明朗」「知性」「福運」をあげている。去年の卒業生へのインタビューでも「知性」「教養」「明朗」などの観点があげられており、「希望の乙女」を理想の女性像とするなど、教員と卒業生の間に同じ見解が見出された。

⁽²²⁾ 創価女子中学校・高等学校希望の乙女編集委員会 編『希望の乙女 創価女子中学校・高等学校一年のあゆみ』、110-111頁。

⁽²³⁾ 「創立者とともに」編集委員会 編『創立者とともに』、250頁。

Bさんは、実際の人形を一つのモデルとして提示している。また、そういった人形を学園生に贈った創立者の思いをくみ取った語りがみられた。特に、フランス人形の園子ちゃん人形について、Aさんはこう語っている。

「（園子ちゃん人形のような）あんなにすばらしい、重厚な、よくできた優雅で立派なフランス人形は見たことがありませんでした。あれから自分もデパートなどたくさんの人形を見ましたが、ありませんでした。先生と奥様が、お忙しい中、フランスで、生徒のために探して買われたのです。名前も、学園生だから園子ちゃんと呼んでくださり、学園生の理想の姿を具体的に身近な姿として示してくださった。すばらしい教育だと思います。」（Aさん）

池田の妻として、彼を支え続けている香峯子夫人についても、その生き方を理想の女性像としてあげているが、これは去年の卒業生へのインタビューでも同じ語りが見られた⁽²⁴⁾。

3. 考察

本研究では、草創期の創価女子学園の様子や、創立者と学園生の絆、教員として感じたことなどを創価女子学園の元教員へのインタビューを通して考察することを目的とした。本研究で明らかになった知見を以下の3点にまとめてみたい。

① 創立者と学園生

今回のインタビューでわかったことは、創立者と学園生がいかに深い絆で結ばれていたのか、またいかに創立者が細やかに心をくだいて学園生の育成に取り組んでいたのかという点である。「一人ひとりを励ました」創立者と、その思いに応えようとする学園生の心の交流は、『新・人間革命』にも描かれているが、生徒たちにとって、自分を温かく見守り、一生涯にわたって励まし、応援してくれる創立者の存在はどれほどの支えになったであろう。Aさんは「先生が見つめてくださることが、生徒がかげひなたなく頑張る力になった。生徒を明るくした」と語っているが、一創立者が、その在校生の精神的発達にここまで影響を与えている例は、他にあまり見ることができず、創価女子学園の一つの特徴ともいえる。Bさんは、草創期の創価女子学園について、以下のように語っている。

「やっぱり先生の思いがしっかり入った手作りの人材学校だったと思います。振り返ってみると先生の心の深さがしみじみと感じられる。」（Bさん）

創立者と教職員、また生徒が一体になって学園建設に取り組み、創立者の思いがダイレクトに生徒にひびいていく、生徒も創立者の真心に全力でお応えしようと頑張る、またそれを教職員が見守るという関係がこの当時の学園には見られたのであろう。その意味で、この草創期の学園でおこなわれた人間教育は、Aさんが『奇蹟の女子教育』というように貴重なものであったと考え

⁽²⁴⁾ 富岡比呂子「池田大作の教育思想—女子教育の観点から（2）—」、36—37頁。

られる。

② 幸福観と女性の生き方について

幸福観や女性のあるべき生き方については、去年も話題になったが、今回は共通してみられる部分と新たに出てきた視点とに整理してみていきたい。まず、共通している点は、幸福観において「人のために生きること」という利他的精神や「苦難に負けないこと」という生きる姿勢についての回答が得られ、これらは去年のインタビューでも同様の回答が見られた。今回新たに出てきた視点としては、「他者と理解し合うということ」があり、池田とワヒド元大統領の対談に見られる理想の夫婦の話を通して、「夫婦が真にお互いの生き方を尊重し、理解し合うこと」の素晴らしさが指摘された。幸福は、個として独立しているものではなく、あくまでも他者との信頼関係や共感し合う関係性から生まれるという観点を示唆しているものと思われる。

女性の生き方については、去年と同様に「他人の不幸の上に自分の幸福を築くことはしない」という信条で生きること、庶民のリーダーという観点や、内面的資質として「気品や品格」「明朗」「知性」「福運」があげられた。また、3モットーの中の希望については、Aさんは、「女性にとって希望を持ち続けることがいかに大切か」と強調し、それがひいては「自分で幸福になっていく力」「自分で自分を幸せにしていける力」につながっていくと語っていた。また、「りりしい女性じゃないとりりしい男性を育めないのではないか」と語り、女性が確固たる信念を持つことが、ひいては男性の育成にもつながり社会全体に益することにつながるとの俯瞰的な視点に立った見方が示されている。この「誰かから幸福にしてもらうのではなく、自分で幸福になっていく」という観点は、人生を積極的・能動的に生きようとする前向きな姿勢を示しており、一つの新しい女性像のビジョンが見出されたといえる。

③ 追加調査でわかったこと

今回の調査で新たにわかったことは、教員の視点で見た創価女子学園がどのような場所であったかについてである。生徒の様子や教員としてどのように生徒に関わることができたかなど、独自の視点を新たに見出すことができた。Bさんは「創立者だったら、どのように生徒に接するだろう、どんな言葉かけをされるだろう」と常に自身に問いかけながら教職に携わっていたと語っていた。彼女は担任していたある生徒が不登校になったときのことについて以下のように語ってくれた。

「創立者が『言葉かけが大事だよ』とおっしゃったんです。それを聞いて、自分がいかに生徒に対する働きかけが足りないかがわかった。先生の学園生に対する深い思いは真似しようと思ってもできることではないですが。もし先生のまなこがあったら、生徒の苦しみも取り除いてあげることができるのと思いました。」(Bさん)

この語りから、教員自身も創立者と同じ心で教育することの重要性を認識していたことがうかがえる。また、自身の教員生活をふりかえって、「(先生のご構想の)教育の輪に加えていただい

た。私の人生はそれだなんて思います。『家庭は大事だ』という指導が原点です。」と語っている。ここから、教育を自身の最後の事業と非常に重く位置づけた池田の思いをくみ取り、その教育活動の一翼を担う思いでAさんもBさんも教職に携わってきたのだと考えられる。また、「どんな生徒がいても、驚き、拒否することなく、まずはすべてを受け入れ、理解する」ことを池田が示したことも、教育者としての心がまえとして肝要な点であるといえよう。

Aさんは、自身の教員生活の中で、卒業後の生徒との交流についてふれている。

「蛸会の方々との交流はずっと続いていて、今も、会えば昨日まで会っていたかのように話ができます。絆は私の人生の喜び、最高の宝です。高校3年まで担任したのは、東京校の15期。男子のクラスで、卒業以来ずっとクラス会を開いて、毎年呼んでくれます。卒業して25年以上たつのに『先生』と言って頂いて。社会の中で皆奮闘している。生徒との絆は本当に喜び。池田先生との深い絆の中に私も入れて頂いています。何という宝物を頂いたんだろうといつも感謝で一杯。私などでもこれだけ嬉しいのだから、池田先生はどれだけ嬉しくいらっしゃるだろうと思います。教員生活はけっして長くはなかったけれど、創立者のお蔭で、本当に豊かな人間関係の中にあつて、こんなに幸せなことはないと思っています。」（Aさん）

この語りからは、Aさんが自分の生徒を持てること、またその成長ぶりを見守ることのできることのありがたさを教員の喜びの一つとして感じていることがうかがえる。またその感慨を「池田先生はどれだけ嬉しくいらっしゃるだろうと思います」と創立者の立場になぞらえて語っており、創立者の思いを鑑みることのできる一つの言説といえよう。

また、今回のインタビューを通して、池田が創価教育を通して育成しようとしていた人材のモデルとして「庶民のためのリーダー」という観点が見出された。これは、東京創価学園の開校時に池田が「創価学園は、あくまでも日本の未来を担い、世界の文化に貢献する、有為の人材を輩出することを理想とするものであり、それ以外のなにものもないことを断言しておきたい」⁽²⁵⁾と述べているように、学園創立の根幹の精神であるといえる。リーダーについて、池田は第11回栄光祭で以下のように述べている。「ともかく、学園生、創大生はありとあらゆる社会にはいって、リーダーになってもらいたい。一人も残らずリーダーに、なんらかのリーダーに、これを合言葉として進んでいていただきたい。リーダーは立派に人生に勝った象徴です。リーダーになったこと自体、だれがなんといおうともこれは事実の姿です。この意味において、全員が一人も残らず、社会のために、世界平和のために、人生、人間という行進のために、なんらかのリーダーになっていただきたいということを心からお祈りし、きょうのあいさつといたします」。⁽²⁶⁾これは、当時の男子校での指導であったが、女子学園生に対しても、「一人のために尽くす人に」と、自身の利益のみを追求するのではなく、どこまでも人のため、社会のために貢献する利他的精神を兼ね備えた優秀な人材を志向していたと考えられる。今回と前回のインタビューを通して、この創立者の「民衆の指導者たれ」「庶民のリーダーたれ」という強い願いが、教員や卒業生にも脈々と

⁽²⁵⁾ 「創立者とともに」編集委員会 編『創立者とともに』、6頁。

⁽²⁶⁾ 「創立者とともに」編集委員会 編『創立者とともに』、195—196頁。

受け継がれていることが明らかになったことも、新たな知見といえよう。

さらに、今回は女性の生き方として「負けないこと」の重要性が何度も回答者から指摘された。池田は男子校である東京の創価学園の指導においても「負けないこと」の重要性について以下のように述べている。「勝つということも大切であるかもしれない。しかし、負けないということは、もっと深い忍耐を持ち、時を待ち、そして崇高な人生の戦いであることを忘れてはいけません。勝つことも大切です。それ以上に『俺は負けない』という信念を、生命の基底部の中に強い強い芯として入れていってもらいたいのです」⁽²⁷⁾「勝つことだけが人生でない。勝とうと背伸びして道理にはずれてしまつては、何にもなりません。負けないという人生は、永久に勝ちである。勝つことよりも負けないことのほうが、実は偉大な勝利なのです。それも全人類の真理の哲学なのであります」⁽²⁸⁾特に女性は、男性に比べるとさまざまな縁によって自身に変化し、また変化する周りの環境に自己をうまく合わせていく適応能力や柔軟性を求められることが多い。その中で困難にくじけて希望を失うことなく、現実にも負けないで生きてほしいとの創立者の思いが読み取れる。その意味で人間として生きていくうえで、勝つことよりも負けないことが大事であり、実は負けないこと自体が偉大な勝利であるという観点は大きな意義があるといえる。

最後に、本研究の限界と今後の課題について述べる。今回は、調査対象者が2名と少数ではあるが、教員の視点から見た女子学園の状況を検討することができ、創立者と学園生の関係を第三者である教員の立場から考察することができたことは新たな知見といえる。学園生にとって、また教職員にとっても創立者の存在は非常に大きく、その後の自身の人生や生き方に大きな影響を与えたといえる。創立者を人生の師匠と定め、尊敬する姿勢は、今回のおよび前回のインタビュー回答者にも共通してみられる観点であり、その意味で卒業生と教職員の間に共通する特質の一つといえよう。今回インタビューした2人とも当時のことを語るときに、懐かしく創立者のことを思い出している様子がうかがえ、また自身が教えた生徒たちへの温かい思いが筆者にも伝わってきた。草創期の創価女子学園は、さまざまな形で創立者が学園建設に携わり、時間的にも精神的にも心血をそそいで生徒の教育にあたった、学園の歴史をふりかへても非常に稀でかつ貴重な時期であったといえる。そこには、池田の人間教育にかける熱い思いが見出され、それが開学して30年以上たった現在でも、当時の教職員の心に深く残っている点は特筆すべきものといえよう。

【謝辞】

本研究をおこなうにあたり、快く調査にご協力いただいた2名の調査協力者の皆さまに心より感謝申し上げます。長時間にわたってのインタビューにご協力いただき、御礼申し上げます。

⁽²⁷⁾ 「創立者とともに」編集委員会 編『創立者とともに』、190—191頁。

⁽²⁸⁾ 「創立者とともに」編集委員会 編『創立者とともに』、200頁。